

序論)

皆さん、おはようございます。

皆さんは「死」について考えることがありますか？多くの人は、死について考えることを避けようとなります。不吉だ、縁起が悪いと。でも、聖書は違います。聖書は死について真正面から語り、そして死の向こう側にある希望を私たちに示してくれます。

今日、私たちが開くのは第一コリント 15 章、復活について語られている章です。この章でパウロは、キリストの復活がいかに私たちの信仰の土台であるかを論じてきました。そして今日の箇所では、もっと実践的な問い合わせがなされます。「復活を信じるということは、私たちの今の生き方をどう変えるのか？」という問いただす。

2000 年前のコリント教会の人々も、そして今を生きる私たちも、同じ問い合わせに直面しています。復活の希望は、単なる理論ではありません。それは、私たちの毎日の選択を、人間関係を、そして人生の優先順位を根本から変えるものなのです。では、御言葉を開いてまいりましょう。

1) なぜ、死者のためのバプテスマをしているのか -死者のよみがえりがなかったらそれも無意味-

まず 15 章 29 節を見てみましょう。

15:29 そうでなかつたら、死者のためにバプテスマを受ける人たちは、何をしようとしているのですか。死者が決してよみがえらないのなら、その人たちは、なぜ死者のためにバプテスマを受けるのですか。

コリント教会の人たちは「死者のためのバプテスマ」というものをしていました。これが実際にどういったものだったのかは、正直なところ、よくわかつていません。キリストを感じたけれども、洗礼を受ける前に死んでしまった人の代わりに洗礼を受けることだったのか。あるいは、死んでしまった人の信仰のゆえに、その信仰に続いて洗礼を受けることだったのか。それとも、死んだ人が救われるためにバプテスマを代わりに受けることだったのか。恐らく 3 つ目の意味ではないと思われますが、実際にどういうものだったのかは、はつきりしていません。ただ、確かなことがあります。それは、彼らが死者と何らかのつながりを持つ

として、「死者のためのバプテスマ」を受けていたということです。

ここで大切なことを確認しておきたいのですが、パウロは、この「死者のためのバプテスマ」を肯定しているわけでも、勧めているわけでもありません。事実、彼はこの手紙のこの箇所以外、「死者のためのバプテスマ」について一切言及していませんし、他の使徒たちも死者のためにバプテスマを受けるということを教えていません。

では、パウロはなぜここでこの話を持ち出したのでしょうか？

パウロは、「死者のためのバプテスマ」という異様な儀式をしているコリント教会の人たちの現状を用いながら、彼らの死者を惜しむ思い、死者とのつながりを持とうとする思いに注目しているのです。そして、こう指摘します。そのように死者のために何かをしようとしたとしても、「よみがえり」がなければ死者は死に囚われたままであり、何の意味もないのだと。

つまり、「死者のよみがえりはない」と主張しながらも、「死者のためのバプテスマ」をしていたようなコリント教会の一部の人たちは、言行不一致の矛盾した状態にあるということです。

本当に死者を惜しみ、死者のために何かをしたいと思うのであれば、なおさら、キリストが初穂となって示してくださいました「死者のよみがえり」を信じるべきなのです。

「死者のためのバプテスマ」自体は、聖書が正しいこととして教えているものではありません。でも、私たちが死者を惜しみ、何らかの希望を抱きたいと思うのならば、なおさら、キリストご自身がよみがえり、そして聖書が度々教えている「死者のよみがえり」を信じなければいけないのです。

2) なぜ、パウロたちは日々死にさらされているのか -よみがえりがあるからではないか-

次に、「死者のよみがえり」という聖書の約束は、パウロたちがいのちをかけて宣教する原動力でもあったということを見ていきましょう。

30 節から 32 節を見てください。

15:30 なぜ私たちも、絶えず危険にさらされているのでしょうか。

15:31 兄弟たち。私たちの主キリスト・イエスにあって私が抱いている、あなたがたについての誇りにかけて言いますが、私は日々死んでいます。

15:32a もし私が人間の考え方からエペソで獣と戦ったのなら、何の得があったでしょう。

32 節の「もし私が…エペソで獸と戦った」というのは、実際にエペソの闘技場で獸と戦わされたということではありません。「獸と戦う」ような困難、迫害、苦難にあったという比喩表現です。

なぜそう言えるかというと、パウロはローマの市民権を持っていましたからです。使徒の働きをみると、その市民権を示すことによって鞭打ちの不当性を警吏に訴えたり、百人隊長に示して鞭打ちを回避したといった出来事が書かれています。ローマの市民権を持っている者はその制度によって保護されています。それゆえ、その市民権を持っているパウロが獸と戦うようにさせられるということは、当時のローマの制度からみても考えにくいのです。

しかし、パウロが実際に獸と戦っていなかったとしても、エペソにおいて銀細工職人たちの扇動によって暴動が起こされ、いのちを狙われたり(使徒 19:23-41)、ユダヤ人の陰謀によって苦しめられたり(使徒 20:19)、生きる望みを失うほどの苦しみ(第二コリント 1:8)にあっていました。彼はそういった苦しみのことを指して「エペソで獸と戦った」と表現したのでしょうか。

どちらにしても、パウロはいのちの危険に遭いながらも、福音を宣べ伝え続けていました。

それは、キリストによって示された「死者のよみがえり」が実際にあるとパウロが信じていたからであり、この世のいのちよりも、よみがえりによって与えられるいのちの方に価値を置いていたからです。

【主】イエス・キリストは、ご自分に従う弟子たちにこう言わされました。ルカの福音書 9 章 23 節、24 節です。

9:23 イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。

9:24 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです。

【主】イエス・キリストは、この世のいのちを失っても失われないいのち、キリストによって与えられるよみがえりのいのち、永遠のいのちを指してこのように言わされたのです。そして、パウロもその真実を知っていたからこそ、日々死に直面しながらも、キリスト者として歩み続けたのです。

「死者のよみがえり」を信じる信仰は、この世のいのちの束縛を超えて、いのちがけでキリストのために生きる力を与えてくれるものです。復活信仰は、この世の何者にも捕らわれない、死さえも乗り越える力を与えてくれるのです。

そして、パウロはその復活信仰に生きない者の歩みについても言及しています。32節の後半です。

15:32b もし死者がよみがえらないのなら、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」ということになります。

「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」というのは、古代ギリシャ・ローマ世界で広く共有されていた人生観です。当時の墓碑銘や、宴会のモザイク画や、風刺の詩などで、ほぼこのままの形で繰り返し登場しています。まさに、復活の信仰を持っていない古代ローマ人たちは、このような価値観で刹那的な人生を歩んでいたのです。

また、現代でも多くの人が「どうせ死ぬのだから、今を楽しく生きた方が良い」というようなことを言っています。コンピュータの Mac や iPhone を作ったスティーブ・ジョブズやビートたけしも同じような主張をしていますし、様々な音楽や映画でも、「どうせ死ぬのだから、今を楽しく生きろ」と主張しています。

これはまさに、死の先に希望を持つことができない人たちの発想であり、ある意味では死に絶望している人の考え方です。キリストによる「よみがえり」を知らず、復活信仰を持っていない人は、死というどうにもならない出来事を前にして、今だけを見つめ、今だけよければいいという考えに帰結してしまいます。

しかし、キリストの復活を信じ、よみがえりの希望を持っている者はそうではありません。パウロが復活信仰によっていのちがけで福音を宣べ伝えたように、復活の信仰を持つことは、今だけの生き方ではなく、永遠の世界を見据えた生き方、この世のいのちに捕らわれない生き方をすることができるのです。

ドイツ人でありながらヒトラーに抵抗したディートリヒ・ボンヘッファーは、復活の信仰を持っていたからこそ、ヒトラーに忠誠を誓おうとする教会を非難し、自分が処刑される時にも「これは終わりではない。私にとっては、いのちの始まりだ」と宣言しました。

同じように復活信仰があるからこそ、コリー・テン・ブームという女性も、第二次世界大戦中、いのちの危険を覚悟しながらもユダヤ人を匿いました。

また、黒人公民権運動の指導者であったキング牧師も、常に暗殺の脅迫を受け、迫害されながらも活動を続け、暗殺前日の演説では「私は約束の地を見た。私はそこに行けないかもしれない。しかし、それでよい」と語りました。彼は復活の信仰を持っていたからこそ、公民権運動の結果を見ることができなくとも、そのために命をかけることができたのです。

だからこそ、神様を信じ、キリストを信じ、復活を信じている者と、信じていない者では、生き方が根本的に変わってくるのです。

そして、この世界を創造された神様には不可能なことが一つもないことを知り、そのお方がキリストをよみがえらせ、私たちをよみがえらせてくださると信じるのならば、私たちは必然的に、この世の人たちと調子を合わせた生き方ではなく、この世の人たちと違う生き方をするようになるのです。

3) 惑わされるな -よみがえりを信じない人たちの悪い影響を受けずに、正しい生活をしなさい-

だからこそ、パウロはコリント教会の人たちに、惑わされないようにと命じているのです。33節を見てください。

15:33 惑わされてはいけません。「悪い交際は良い習慣を損なう」のです。

この「悪い交際は良い習慣を損なう」というのは事実です。

例えはソロモン王は、神様に自身の栄光ではなく、【主】の民を正しく裁くための知恵を求めた賢い王様でした。しかし、彼はまことの神様を恐れない異国の女性たちと結婚をし、まことの神様に従おうとしない妻たちと交わった結果、【主】を恐れるのではなく、偶像の神様に心を向けるようになってしまいました。

また、アルコール依存や薬物依存から回復するための治療を受けた人たちが共通して語っていることがあります。それは「薬やお酒をやめるために、まず変えなければいけなかったのは『人間関係』だった」ということです。彼らにとって薬やお酒から離れるために必要だったのは強い意思ではなく、彼らを誘惑する環境や人間関係を切り離して、新しく自分を支えてくれる人、痛みを分かち合うことができる仲間との関係を構築することだったのです。

私たちが信仰的に正しく歩むために必要なことも同じです。聖書が教えていることを否定する人や、聖書が教えていないことを語る人たちと関係を持つことは、正しい信仰生活を損なうことに繋がります。

実際、コリント教会の人たちが抱えていた分裂、分派の問題や、性的な乱れの問題というのは、聖書が教えている復活を信じない人たちの言葉を真に受け、惑わされてきたことも原因の一つであったのでしょう。だから、パウロは「惑わされてはいけない」「悪い交際は良い習慣を損なう」といっているのです。私たちは、復活を信じないような人たちのことば、偽りの教えを語る人たちのことばに騙されないようにしなければいけません。

そして、パウロは言います。34節です。

15:34 目を覚まして正しい生活を送り、罪を犯さないようにしなさい。神について無知な人たちがいます。私はあなたがたを恥じ入らせるために言っているのです。

私たちが信仰的に正しい生活をし、罪を犯さないように歩むためには、神様の力を知らず、よみがえりを信じないような人の言葉を真に受けてはいけません。

この世界を創造し、キリストを処女からお生まれになるようにし、十字架の後、三日目に蘇らせてくださった【主】は、私たちをもよみがえらせてくださいます。

だからこそ、私たちの人生が、この世の死によって終わるなどと考えずに、キリストによる復活を信じ、永遠の世界があることを覚えて、刹那的にこの世の快楽を求めて生きるのではなく、やがて与えられる神の国に宝を積むように、永遠の世界、復活後の神の国を目指して、罪から離れ、【主】に喜ばれる歩みをしていくのです。

結論)

愛するみなさん。今日、私たちはパウロが語った三つの問い合わせに耳を傾けてきました。「なぜ死者のためのバプテスマをするのか」「なぜパウロたちは日々危険にさらされているのか」「なぜ惑わされてはいけないのか」。そして、その答えはすべて一つのこととに集約されます。それは「復活」です。

復活の希望は、私たちの人生を根本から変えます。それは単なる未来の出来事ではなく、今日、この瞬間の私たちの選択を導く力なのです。

ボンヘッファーが処刑台に向かいながら「これはいのちの始まりだ」と言えたのは、復活を信じていたからです。キング牧師が「約束の地を見た。私はそこに行けないかもしない。しかし、それでよい」と語れたのは、復活の希望があったからです。私たちもまた、同じ希望に生きることができます。

例えば、みなさんが信仰ゆえに仕事より礼拝を選んだ結果、職場の人に嫌味を言われたり、攻撃にさらされたりすることがあったとしても、例え、それによって職を失ったとしても、キリストによる復活、永遠の世界に比べたら、この世の苦しみは一時的なものです。例えこれから先、世界に大きな戦争が起こり、過去の戦争の時のように国が、礼拝の最初に天皇のことばを唱えるようなことを求めて、それを拒否した結果、大きな迫害にあったとしても、復活の信仰を持っているのならば、この世の苦難を恐れる必要はありません。例え、今週のあなたの歩みの中で、信仰的決断をした結果、自分が持っているものを失うようなことがあったとしても、復活のキリストはそ

の失ったもの以上の祝福をあなたに与えてくださいます。

だから、私たちは復活を信じ、復活のキリストを信じて、この世と調子を合わせるのではなく、【主】のために自分の人生、自分の生き方を獻げ、【主】の御心を求めつつ、その【主】の導きのために自分を変えていくのです。ローマ人への手紙 12 章 1 節、2 節にはこのように書かれています。

12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として獻げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。

12:2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。

この一週間、皆さんはどのような選択をするでしょうか。何に時間を使い、誰と交わり、何を優先するでしょうか。その選択の背後に、復活の希望はあるでしょうか。神様は、キリストをよみがえらせたその同じ力で、私たちをもよみがえさせてくださいます。この約束を信じるなら、私たちはこの世の価値観に流されず、永遠の視点で生きることができます。

目を覚ましましょう。惑わされないようにしましょう。そして、復活の希望に生きる者として、今週も【主】に喜ばれる歩みをしてまいりましょう。